

## 6) 沿岸帯の貝類現存量の推移

西森克浩

### 【目的】

水産試験場では、1953年(昭和28年)、1969年(昭和44年)、1995年(平成7年)、今回(2002-2003年)の計4回、琵琶湖沿岸帯の貝類現存量調査を実施してきた。これらの結果から貝類現存量の増減を把握し、今後の施策の参考資料とする。

### 【方法】

過去に4回実施された琵琶湖沿岸帯の貝類現存量調査で得られた貝類の現存量を比較する。

### 【結果】

①貝類現存量は1953年には約2万5千トンであったが、1969年には約1万1千トンと激減した。その後は1995年・約1万1千トンと横這いであったが、今回は約9千トンと前回調査より約2割減少した(図1)。

②小型巻貝類(主にカワニナ類)、大型巻貝類(主にタニシ類)はそれほど大きな変動はみられなかった。1953年と比べると、小型イシガイ類(主にタテボシガイ)は増加、大型イシガイ類(主にドブガイ類)、シジミ類(ほとんどがセタシジミ)は激減した(図2)。

③1953年と今回を比べると、すべての水深で現存量が減少した。水深1mの現存量は、水位変動や波の影響を受けるためか現存量は昔から少ないが、前回調査、今回と減少は続いている。前回調査と今回を比較すると、水深2mの現存量の減少が著しい(図3)。

④今回調査のシジミ類の現存量を殻長階級別に見ると、15mm未満の未成熟貝が452トン、15mm以上の成貝現存量が504トンであった。成貝現存量の内訳は、15~20mmが168トン、20~25mmが240トン、25mm以上が96トンと推定された(図4)。

近年、水深2m以浅での貝類現存量の減少が著しい。この原因究明に早急に取り組む必要がある。また、重要な水産資源であるシジミ類の現存量は調査開始以来減少し続け、今回の現存量956トンは1953年(12,330トン)のわずか7.8%となっている。セタシジミの増殖に関しては、県ならびに漁業関係者がいくつかの取り組みをしているが、なお一層の取り組みが必要である。

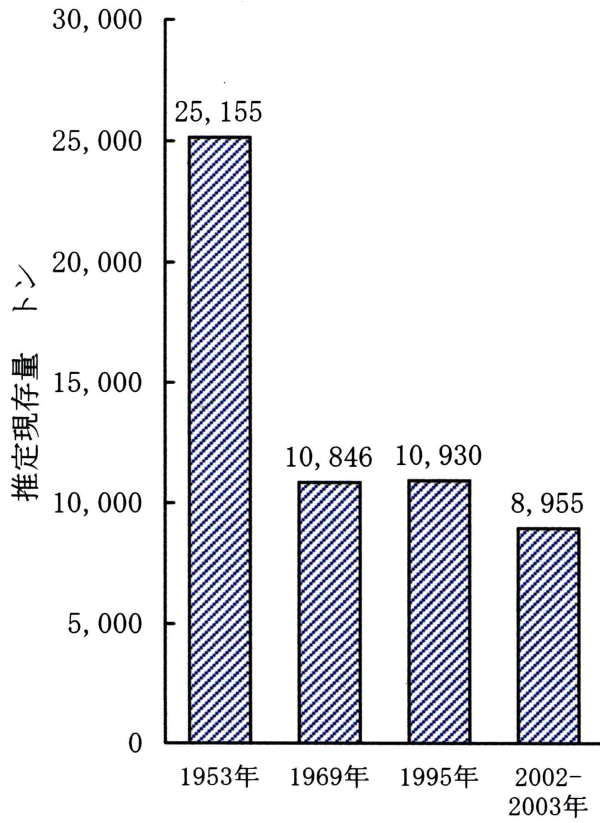


図1 貝類現存量の推移

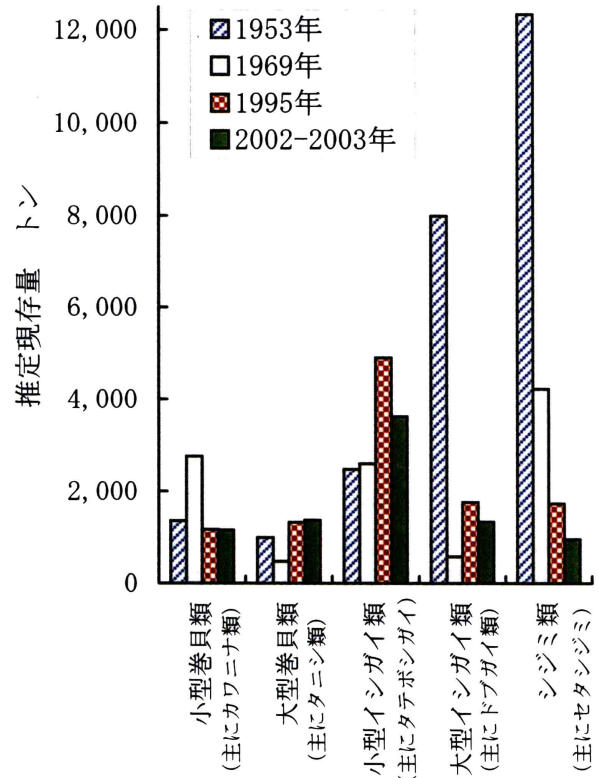


図2 貝類の種類別現存量の推移

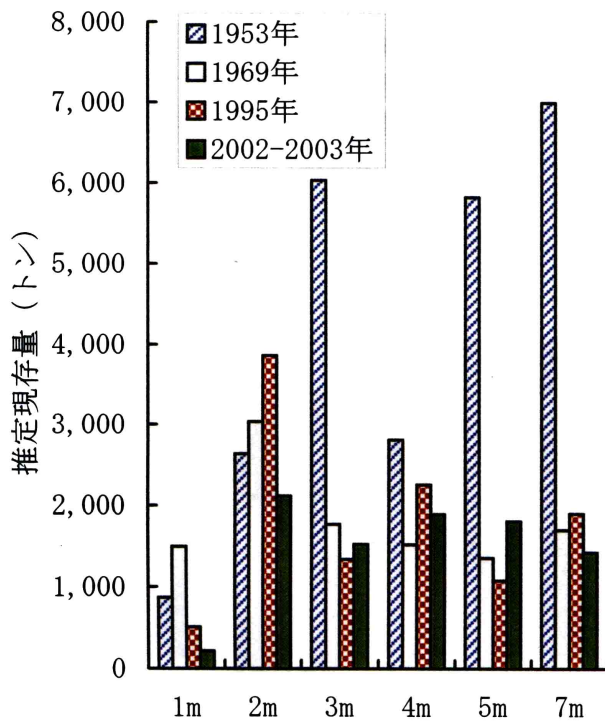


図3 貝類の深度別推定現存量の推移

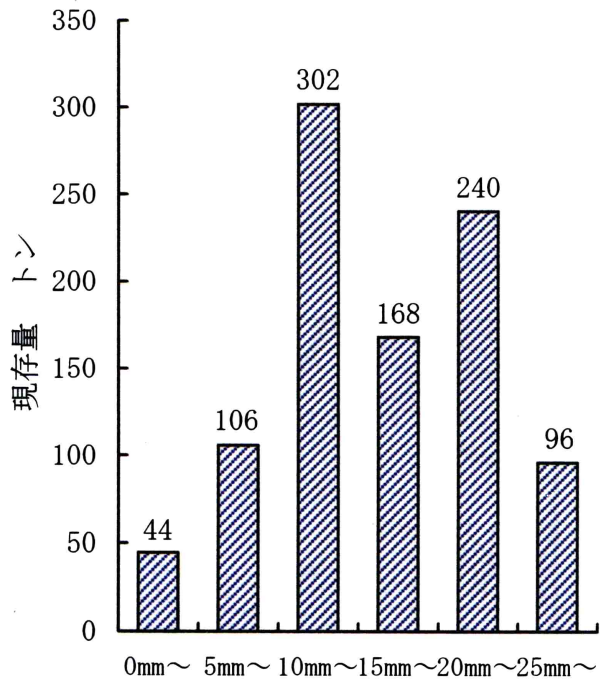


図4 シジミ類の殻長階級別現存量(2002-2003年)